

〔書評〕

関根達人著

『つながるアイヌ考古学』

袁島 栄紀

本書は、すでに多くの著書・論文を世に問うている関根達人氏（以下、「著者」とする）が、「アイヌ考古学」に関する最新の知見を縦横に駆使して書き下ろした著書である。研究分野と時代の幅広い著者であるが、アイヌ考古学に関する著書としては、濱田青陵賞を受賞した学術論文集である『中近世の蝦夷地と北方交易…アイヌ文化と内国化』（吉川弘文館、二〇一四年）、一般書として好評を博した『モノから見たアイヌ文化史』（吉川弘文館、二〇一六年）に続く、三冊目の単著となる。なお、既発表の二冊に関して、評者は「研究動向」アイヌ史研究の現在―交流史といくつかの論点―（『歴史学研究』一〇一三、二〇二一年）のなかで若干の私見を記したことがある。あわせて参照いただければ幸いである。

本書は一般書に分類されるであろうが、著者の最新の見解がふんだんに盛り込まれており、この分野を専門とする研究者にとっても読み応えのある充実した概説となっている。まず本書の構成を掲げたい。

はじめに

第1章 アイヌ文化へのまなざし

1 アイヌ文化を取り巻く現状

2 アイヌ文化・日本（ヤマト）文化・琉球文化
アイヌ研究の歴史

1 中世・近世の和人からみたエゾ像
植民地研究としてのアイヌ考古学

2 先史考古学とアイヌ考古学

3 先史考古学とアイヌ考古学

4 アイヌ史と考古学

第3章 アイヌ文化成立前の北海道―アイヌ文化前史―

1 北海道の旧石器文化・縄文文化・続縄文文化

2 オホーツク文化とアイヌ文化

3 擦文文化とアイヌ文化

第4章 アイヌ文化の形成と特徴

1 時代区分論

2 アイヌ文化の形成過程

3 中世的世界の形成とアイヌ文化の成立

4 擦文人のサハリン進出とアイヌ文化の形成

第5章 和人の進出とアイヌ文化の変容

1 道南の戦国的世界とアイヌ社会

2 松前藩の成立とアイヌ社会の再編

3 蝦夷地の幕領化とアイヌ文化の変容

第6章 本州アイヌと樺太アイヌ

1 本州アイヌの考古学的痕跡

2 樺太アイヌとサハリン出土の日本製品

第7章 アイヌ考古学の展望

あとがき

「はじめに」では、二〇一九年の「アイヌ施策推進法」施行以後、アイヌ文化への社会的関心が高まっているが、過去の実態に即したアイヌの歴史に関する理解が浸透していないとする。そこで本書は、最新の考古学的成果と関連分野との連携によって、「民族共生」に向けた「アイヌ考古学」を提示するとする。『つながるアイヌ考古学』という本書のタイトルの、何重もの意味の一端がここに表現されている。

第1章では、まず、アイヌ民族は、和人が本格的に進出する以前から、北海道とその周辺地域に先住してきたが、近代国家の成立によって日本国民に編入され、多くの不利益や人権侵害を受けてきたとする。これは、他国の先住民が置かれたのと同様の経験であるとする。その後、一九七〇年代頃から、世界的に先住民の権利獲得運動が活発化し、二〇〇七年の「先住民の権利に関する国際連合宣言」に結実するが、そうした国際的な動向とかわりながら、「先住民アイヌ」というテーマが浮上し、学術研究にも大きな作用を及ぼすようになったとする。とくに、過去に研究者によって不正な方法で収集されたアイヌの遺骨・副葬品をめぐる問題は現在も未解決であり、研究倫理を整備する取り組みも現状で顕著な進展は見られず、現在のアイヌ研究は厳しい状況に置かれているとする。なお、文化人類学・民族学では「一九九〇年から」先住民自身が調査の主体として非先住民研究者への批判的意見を強めているとするが（一二頁）、これは「一九九〇年代から」のミスであろうか。ある

いは、一九八九年の日本民族学会による「アイヌ研究に関する日本民族学会研究倫理委員会の見解」（『民族学研究』五四（一）、一九八九年）を踏まえた記述であろうか。

島尾敏雄や藤本強、佐々木利和ら先学の問題意識を継承し、日本列島（ヤポネシア）には「アイヌ文化」「日本（ヤマト）文化」「琉球文化」の三つの文化圏が連なっているとする。南北の文化圏は、本土に「中世的世界」が形成された一二世紀頃を画期に、それぞれ独自の「民族社会」として確立していったとする。文字史料の少ない前近代のアイヌや琉球の研究には、考古学がきわめて有効であり、ヤポネシアの南北の「前近代交易型社会」という枠組みでの比較研究が求められるとする。なお、アイヌ社会との比較研究の対象としては、王のいた琉球より、王や士族のいなかった奄美がふさわしいとする。

第2章では、これまでの和人による「アイヌ研究」の歩みを、その問題点とともに振り返り、現状と課題について述べる。まず、一二世紀頃に、和人の意識に「エゾ」認識が表出してくるが、これは、考古学的な擦文文化の終焉／アイヌ文化の成立と時期的に重なるとする。また、各種の『聖徳太子絵伝』のなかのエゾの描写を比較し、一一世紀の秦致貞作（東博蔵）の『絵伝』のエゾはリアリティが乏しいが、一四世紀の茨城県那珂市上宮寺蔵の『絵伝』ではアイヌに対する知識を「ある程度」踏まえた描写になっているとする。これらのことから、和人がアイヌに関する情報を得るようになったのは一二世紀頃が画期であるとする。

江戸後期に、当時における実証主義と論理的思考にもとづき、「縄文」と「アイヌ」の関係性に言及した菅江真澄の業績の先駆性を評価する。

明治以降には日本列島の先住民をめぐる議論が活発化し、アイヌ説と非アイヌ説が議論されるが、その過程で人類学者・考古学者による遺骨収集がおこなわれ、その後のアイヌ研究に厳しい目が向けられる一因となったとする。次いで、戦後のアイヌ考古学を主導した駒井和愛、渡辺仁、宇田川洋らの学問の系譜を紹介し、それらは先史考古学・生態人類学的考古学の色彩が強い研究であったとする。その継承者として、近年の瀬川拓郎の研究に触れる。瀬川の研究は、北にばかり目を向けていたアイヌ考古学を南にも目を向けさせたが、ここでは「アイヌ文化」の考古学的データの具体的な検討は不足しているとする。そうした意味で、アイヌ考古学を日本の中近世考古学の成果と接合することは、アイヌ考古学にとってきわめて有意義であり、その点に著者による研究の大きな特徴があるとする。

第3章では、旧石器文化から擦文文化までを対象に、著者のいう「アイヌ文化前史」の流れと特徴、のちの「アイヌ文化」との関係が描かれる。とくに、続縄文文化の意義を重視し、弥生文化に比べ「遅れた」文化ではないとする。津軽海峡は稲作の可否を分けるほどの障壁でなく、道南の続縄文人は「稲作をおこなおうと思えばできたが、あえておこなわなかった」とする。とくに続縄文前期の恵山文化について、本州との交易のため水田稲作でなく狩猟・漁労に特化する道を選んだとする。また、高瀬克範の見解（『続縄文文化の資源利用』吉川弘文館、二〇二二年）を踏まえ、続縄文後期には、縄文・弥生のどちらとも異なる、のちの「前近代アイヌ文化期」につながる社会経済的特徴が成立したとする。

オホーツク文化について概観し、従来、イオマンテ（仔熊飼育型クマ

送り儀礼）の源流の問題などの面で、アイヌ文化とのつながりが注目されてきたとする。枝幸町目梨泊遺跡から出土した金銅装直刀の意義を重視し、オホーツク文化の担い手は、大陸や擦文集団との交易だけでなく、律令国家ともパイプをもっていたとする。そして、「アイヌ文化の文化要素の系譜」に結論を出すためには、①擦文文化に組み込まれたオホーツク文化の文化要素、②一三、一四世紀のアイヌ文化の北上にともなう大陸文化の受容、③ヤマト文化の影響、のそれぞれの詳細な検討が必要だとする（この点は第4章に詳述される）。

擦文文化の成立にかかわる本州文化の影響について、「エミシ社会の生活様式・生活用具を北海道に持ち込んだ」ものとする。また、「擦文文化」のなかに「アイヌ文化」に継承される要素を抽出しようとする。アワ・キビ・ヒエを利用する「アイヌ文化の雑穀栽培」、対和人の交易品である皮革・矢羽根・サケ・コンブは、擦文時代後半には出揃っていたとする。本州から北海道への移出品としては、鉄製品が最重要であるとする。威信財としては、七、八世紀の鉄刀と、一〇、一一世紀の佐波理鉾が重要で、そこには時代による交易の担い手の変化がかかわっていたとする。さらに、一二世紀に台頭する奥州藤原氏の北方交易の実像が、近年次第に明らかになってきたとし、その代表例として近年の厚真町における発掘成果を紹介する。「擦文文化」と「アイヌ文化」の「ミッシングリンク」をつないだ重要な成果としてその意義を強調する。

第4章では、「アイヌ文化の形成」とその特徴について論ずる。歴史叙述には時代区分が必須であるとしたうえで、擦文文化のあと、近代までの時代を「前近代アイヌ文化」と呼ぶことを提案する（なおこれは、

関根ほか編『アイヌ文化史辞典』（吉川弘文館、二〇二二年）ですでに示されている立場である）。そして、「アイヌ文化の文化要素」を「生業」「生活用具（衣・食・住）」「儀礼・信仰」に分けて、それぞれオホーツク文化、擦文文化、ヤマト文化、アムール女真文化との影響関係について検討する。こうしたきわめて具体的な検討のうえに、今日に継承される「アイヌ文化」における、玉・鏡・刀剣を宝物として珍重する精神や、蝦夷刀や鉞形などの形態には、古代や中世前期の日本からの影響が強いことを指摘する。伝統的な「アイヌ文化」が示す「価値観」について、「次第に日本社会との関係性を深める一方で、彼らの価値観は中世前期の段階で「固定」され、それ以降大きく変わることはなかった」（九六頁）とする。こうした論点には、近年の日本史研究における「国風文化」をめぐる議論などを彷彿とさせる部分があり、興味深い。

また、「擦文人のサハリン進出」によって、北方ユーラシア大陸のアムール女真（バクロフカ）文化と接触したことが、「アイヌ文化の形成」の重要な契機となったとの見通しが示される。これは、二〇一四年の著書でも示されていた論点であるが、やはり興味深い指摘である。以上を踏まえて、「北海道の古代文化」を土台に、南のヤマト文化、北のアムール女真文化が接触し、それらが一種の「化学反応」を起こして「アイヌ文化」が生まれたとする。

第5章は、中近世の北海道史の通史を、主として考古学サイドから見通したものであるが、非常に充実した叙述である。奥州藤原氏滅亡後（なお、文治五年（一一八九）の奥州藤原氏の滅亡を「文治三年（一一八七）」と誤記している（一〇三頁））の北方交易について、陶磁器の出

土状況から和人の活動を読み解き、津軽安藤氏について、十三湊とともに、港湾拠点としての余市が重要な拠点であったとする（吉岡康暢による論点の継承）。これらの拠点での交易の画期は、一三世紀末から一四世紀前葉であり、津軽安藤氏による北方交易の本格化を鎌倉後期以降とする。とすれば、鉄鍋の流通などによる土器の廃絶と結びついた、通説的な一三世紀の画期とは因果関係においてズレが生じるが、この点の説明が本書では十分になされていないように見える。

コシヤマインの戦いの背景について、津軽安藤氏が南部氏に敗北したことをきっかけに、十三湊と余市を軸とする安定した北方交易が終わったことで、テリトリーをめぐるアイヌと和人の摩擦が昂じ、民族間の戦いに発展したものとする。近年有力視されている、土木の変（一四四九）による明朝の勢力後退がコシヤマインの戦いの遠因となったという中村和之の仮説には言及されていない。当時の志海苔の一带はアイヌ向け金属製品の一大産地であったとし、志海苔古銭も銅素材として備蓄されたものだったとする。またこの戦いでアイヌは、毒矢のほか鉄鏃や日本刀も武器として活用していたと推測する。夷王山墳墓群の知見などから、勝山館においてアイヌと和人が「共生」していたとするが、その内実は、蠣崎氏が他の和人館主たちとの合従連衡のなかで「アイヌの一部を味方につけていた」ものだとする。このアイヌたちは、通婚などにより形質や生活様式の面での和人化が進んでいたが、祭祀・葬法・食生活などにアイヌ民族としてのアイデンティティを保持し続けていたとする。

シャクシャインの戦いの前夜の二六四〇年代には、アイヌ社会に急速に喫煙が普及し、一気に道東や樺太アイヌにまで広まったとする。また

当時、松前藩が最も欲した産物はシカ皮であったとする。アイヌ社会で活動する「渡りの漆職人」の存在を推定する点は興味深い。シャクシャインの戦いの背景として、交易のための動物資源獲得をめぐるアイヌの地域集団間の軋轢に加え、アイヌのテリトリーへの和人の侵入、一六六七年の樽前山噴火などの自然災害（とくにシカ資源や畑作へのダメージ）という三つの要因が複合して起きたとする。通説化している不公正な交易レートの問題はここでは触れられない。

幕末には、和人の移住増により、一九世紀中葉に蝦夷地における陶磁器の出土量が爆発的に増すが、それは、肥前系磁器・繪皿、上野・高取系甕、徳利の「幕末蝦夷地三点セット」に圧倒的に偏り、アイヌが日常生活で陶磁器を使うようになるのもこの時期であるとする。また、一九世紀の松前ではアイヌ向けのガラス玉が大量に製作されていたとする。

第6章では、近世の本州アイヌと樺太アイヌについて述べる。本州アイヌは、文献史料では戦国時代以降までしかさかのぼることができず、それ以前の状況が不明だが、近年の青森県内の中近世遺跡の発掘調査からこの問題に迫れるとする。なかでも東通村浜尻屋貝塚は、アワビ漁のため、一四、一五世紀の本州アイヌによって営まれた漁村であるとする。また、浪岡城跡、聖寿寺館跡などの中世城館から骨製の中柄や鏃などが出土することに注目し、『氏郷記』などにみえる、和人領主たちに動員された毒矢を使用する本州アイヌの存在を示唆する。その一方で、津軽（大浦）氏関連の遺跡では本州アイヌ関連の遺物がみられないことから、津軽為信は既存の北奥の領主と違い、本州アイヌと敵対的であったとする。さらに、本州アイヌの習俗や交易についても考古学的に記述する。

樺太アイヌについては、まず、玉蟲左太夫『入北記』や松浦武四郎の著述などから、一八五〇年代のサハリン島における先住民（樺太アイヌほか、ニヴフやウイльтаを含む）の居住域や人口について具体的に明らかにする。こうした基礎的な知見を踏まえて、考古資料から樺太アイヌの習俗や交易の実態について述べる。樺太アイヌにおいても日本製品が珍重されたことを指摘し、出土品の器種構成から、樺太アイヌも北海道アイヌと同様の酒儀礼をおこなっていたとする。その他、金属製煙管、鉄鍋、銭貨などについて検討し、考古資料に関する限り樺太アイヌと北海道アイヌの物質文化は似ているとする。例外として、樺太アイヌの女性が身に着けた飾金具付革帯につけられる透かし入りの飾金具は、北海道ではわずかしみつかっていないとする。

第7章では、これまでのアイヌ考古学が先史考古学・生態人類学的考古学に偏り過ぎていたとし、歴史考古学的手法の重要性を重ねて強調する。歴史考古学的手法には、文献史料や伝世資料、民具等の考察を組み込むことが欠かせず、その成功例として、「初期アイヌ文化期」から近代までのタマサイの編年をあげる。タマサイは一八世紀後半を境に大きく変化するが、それはこの時期、タマサイに利用されるガラス玉の主体が大陸産の「カラフト玉」からアイヌ向けの日本製品に替わったためであるとする（一九二頁に「カラフト玉」が」とあるのは、「カラフト玉」から」の誤記か）。また、魚皮の利用にも着目し、今後の重要な研究課題とする。伝世したアイヌ民具を含めた検討により、研究の一層の深化が期待できるとする。とくに、製作技術の研究は、アイヌ文化の伝承活動と直結し、アイヌ民族を主体とする研究の進展が望まれるとする。

雑駁ながら本書の内容についてやや詳しくみてきたが、ここで一点、評者が近年こだわっているアイヌ史の時代区分の問題について述べたい。

この問題に関して著者は、二〇二〇年に開館した国立アイヌ民族博物館の歴史展示が、北海道史の通史を「私たちの歴史」＝「アイヌ史」とする立場を採用し、時代区分がなされていないと批判する。その一方で、近世の文献や絵画、一九世紀以降の民族誌などに記述される「アイヌ文化」に立脚した、通説的な「アイヌ文化期」という概念には、①「二二一―一三世紀に突然アイヌ民族があらわれた」とか、②「明治以降アイヌ文化は消滅した」との誤解を生むおそれがあるとする。こうした認識のうえに著者は、近現代に大きな変容を余儀なくされつつも、現在も「アイヌ文化」が厳然と存続していることを尊重する立場から、従来の「アイヌ文化期」を、「前近代アイヌ文化期」と改称することを提案する。

また著者は、「アイヌ民族史は縄文時代にさかのぼるといえる」(六一頁)とするなど、アイヌ史の連続性・継承性を随所で強調している。この点を丁寧の説明することは非常に重要であろう。だが、それでもなお著者は、「アイヌ文化を定義し、擦文文化とアイヌ文化を切りわけの必要がある」(六二頁)とする。こうした著者によるアイヌ史の時代区分案は、前記の②の問題点に関しては有効といえようが、①の課題については未解決の部分を残すのではないか。

この点に関連して、「アイヌ文化の定義」という課題について、リチャード・シドルの次の指摘を参照したい(リチャード・シドル著／マーク・ウインチェスター訳『アイヌ通史』岩波書店、二〇二一年)。
…アイヌ文化の定義は、アイヌから来たのではなく、和人によって

強制されたものだ。アイヌ文化を「後進的」かつ「劣位」であると見なした公的な蔑視から、「尊重」のレトリックへの変化が起きたのは確かだが、「本物らしさ」[authenticity]「真正性」とは何であるかということを決める力は依然として国家の側にある。(二六六頁)
…文化振興法において国家によって定義された「真正の」アイヌ文化の公式バージョンは、アイヌをステレオタイプ化した「伝統的な」隙間に閉じ込め、現代的な存在形態を否定する危険性を孕んでいる。(二七六頁)

要するに、考古学上の「アイヌ文化期」という概念は、「アイヌをステレオタイプ化した「伝統的な」隙間に閉じ込め」てしまうロジックと、きわめて似通ったロジックを前提としており、シドルの指摘するような、「真正の」アイヌ文化を和人側が定義するという既存の権力関係をなぞったものになってしまふ危険性が高い。現代のアイヌの生活や文化を、紛れもない「アイヌ文化」の一部として位置付けるのと同様に、考古学上の「擦文文化」やそれ以前の文化も含めて、変化と多様性に富んだ「アイヌ文化」の一部として把握するような歴史認識と時代区分が求められているのではなからうか。

なお、本書にはケアレミスと思われる箇所がいくつか目に付き、アイヌ語表記の不統一もみられる。子音のあとに母音の付かない音を、カタカナの小文字で表記する場合もあれば(六九頁の「イトクパ」＝ iokpa (祖印)、「一一五頁の「ルム」＝ rum (麋))、そうでない場合もあり(九〇頁の「イコロ」＝ ikor (宝)、「一二三頁の「ユク」＝ yuk (鹿)など)、基準が気になった。

以上、いくつかの問題点も指摘したが、それらは本書の価値と魅力を大きく減じるものではない。本書では、考古学の資料だけでなく、民具や文献史料、絵画資料、ときには口承文芸まで利用してアイヌ史が叙述される。とりわけ、第6章において、文献史料を縦横に活用して一九世紀のサハリン島における先住民の分布を明らかにした箇所や、第7章の、伝世した民具資料のタマサイを銭貨の年代を糸口に編年する手際などは、著者の研究の学際的手法が存分に威力を発揮した例であり、出色の成果といえよう。

そのうえで、本書の基本はやはり考古学にあり、良質の写真や実測図がふんだんに盛り込まれ、叙述の「根拠を示す」「事実にもとづく」姿勢が貫徹している。こうした手法にも支えられて、きわめて具体的な叙述が展開される。アイヌ史について、和人側の史料からみた政治史との関係だけでなく、具体的なモノ資料から文化史や生活史、社会史を明らかにしていく筆致は、本書のきわだった魅力として多くの読者をひきつけるであろう。

また本書は、地域的には、北海道アイヌだけをクロースアップするのではなく、樺太アイヌや本州アイヌも等しく歴史の主体として叙述しようとする。その際に、樺太アイヌや本州アイヌの独自性だけでなく、北海道アイヌとの共通性・類似性にも目を向ける。さらに時代的にも、オーソドックスな先史・中近世だけでなく、考古学を主たる方法に据えながら、近世末期や近代までも対象に含めている。こうした叙述の方針には大いに感銘を受ける。もちろん、ページ数の配分のうえでは、それらの記述が相対的に手薄であることは否めない。しかしそれでも、先行研究

の蓄積の厚みの違いを考えたとき、これらの地域・時代を等しく「アイヌ考古学」の対象として描こうとする著者の姿勢は、最大限に見習うべきと感じた。

このように本書は、全体として大変読み応えがあり、個別の論点に関しても示唆される点が多かった。研究者はもちろん、このテーマに初めて接する読者にも、刺激的な読書体験を約束する好著といえよう。

(A5判、二〇八頁、新泉社、二〇二三年一月一五日発行、本体価格二五〇〇円＋税)

(みのしま・ひでき 北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授)